

祭りに関する一考察

—滋賀県坂本の日吉山王祭と岐阜県神戸の日吉山王祭の比較—

小川 和 英

A Comparative Study of the Two Hiyoshi-Sanno Festivals at Sakamoto in Shiga Pref. and at Goudo in Gifu Pref.

Kazuhide OGAWA

1. はじめに

岐阜県は、全国的にみても比較的古い形態の祭りが、数多く残されている地域であるといわれている。例えば、重要無形民俗文化財の指定件数をみると、7件あり、昭和61年現在で全国第2位である。その種類は、祭礼行事関係(大規模祭り)2件〔高山祭の屋台行事, 古川祭の起し太鼓・屋台行事〕, 民俗芸能関係5件〔田楽系統一下呂の田の神祭, 舞楽・延年系一長滝の延年, 人形戯系一真桑人形浄瑠璃, 能楽系一能郷の能・狂言, その他一南宮の神事芸能〕であり, このように多種類の例は全国的にも珍しいと思われる¹⁾。このような岐阜県の祭りを考えるには, 岐阜県という視点でみてもその特色を正確に把握することは難しいと思われる。そのためには, 近隣の県の祭りとの比較も重要な一視点になると考えられる。特に西濃の祭りは, 滋賀県の祭りとの関わりが強いように感じられる。例えば, 岐阜県不破郡垂井町の曳軸祭と滋賀県長浜市の曳山祭²⁾, 太鼓踊, などをあげることができる。本稿では, 岐阜県安八郡神戸町の日吉神社の日吉山王祭と, 滋賀県大津市坂本の日吉大社の日吉山王祭とを比較し, その相違点を明らかにすることによって, 神戸の山王祭の特色を考えたい。

2. 坂本の山王祭

(1) 日吉大社

比叡山麓の滋賀県大津市坂本に鎮座している日吉神社の総本社である。比叡山は古くから山岳信仰の対象となっており, その東の尾根の八王子山(牛尾山)山頂には, 祭祀の対象となったと思われる露出した岩盤がある。『古事記』には、「大山おおやま咋くわ神のかみ, 亦の名は山末之大主神, 此の神は近淡海国の日枝の山に座し」とあり, 大山咋神が比叡山の地主神として八王子山にまつられたといわれている。ところが, 大津宮造営にあたって大和の三輪山から大物主神(大己貴神の和魂という)を迎えたので, これを大比叡神(大宮・西本宮)と称し, 元来の大山咋神を小比叡神(二宮・東本宮)と称してまつることになったと伝えられている。さらに, 最澄によって比叡山上に延暦寺が創建され, 円仁の頃には, 日吉神を一山鎮守の神とし, 天台宗守護の護法神とする信仰が明瞭になったとされている。その後, 日吉社は天台宗の興隆や, 延暦寺の発展, 日吉信仰の発展, 荘園の増大などにより勢力を増大していった。なお, 門前町としての坂本も, 商業を中心に栄えた。しかし, 1571年の織田信長による比叡山焼打ちによって, 日吉社とともに焼かれた。その後, 近世に入ると, 坂本は衰えていったが, 日吉社は再建された。

日吉社は, 「山王七社」(上七社)を中心に組織されている。山王七社のうち, 西本宮系の西本宮・宇佐宮(聖真子・田心姫神)・白山宮(客人宮・白山姫神)の三社は, 勧請神で, 宇佐宮は八幡神³⁾を, 白山宮は白山比咩神をそれぞれ勧請したといわれている。なお, 白山宮の創建は, 天台教団の北陸進出と深く関係していたと考えられている。一方, 東本宮系の東本宮・樹下宮(十禅師・鴨玉依姫神)・牛尾宮(八王子・大山咋神荒魂)・三宮(鴨玉依姫荒魂)の四社は, 土着神で, 牛尾宮

と三宮は八王子山山頂にあり、山宮をなし、それに対して、東本宮と樹下宮は里宮を形成している。

(2) 山王祭

祭礼の起源は、延暦10年(791)4月に、桓武天皇によって二基の神輿(大比叡社と小比叡社)が寄進され、唐崎へ渡御が行われたことにはじまるといわれている。中世には、祭礼のたびに神輿が担ぎ出され、次第に祭礼の形も整ってきたと思われる。叡山焼打ち後、近世に入り社殿などが復興するにつれて、日吉祭礼も次第に完成するに至った。完成された日吉祭礼は、卯月の中の午・未・申・酉の4日間にわたって、東本宮の御鎮座神事、西本宮の御鎮座神事、両宮奉幣の神事などによって構成されていた⁴⁾。

次に現在行われている祭りの行事を、時間の流れに沿って簡単に紹介する。

① 3月1日(現在は第1日曜日)〔神輿上げ〕

八王子山山頂の牛尾・三宮両社へ、それぞれの神輿を上げる。

② 4月3日〔大榎神事〕

比叡山中から切り出されて、西本宮の境内に安置されてあった大榎を、大津の天孫(四宮)神社へ送る。この大榎の渡御は、神輿使用以前の古風な祭儀をあらわしたものであるといわれている。

③ 4月12日(卯月中の午の日)〔午の神事〕

牛尾・三宮両社に安置してあった二基の神輿を、夜に八王子山山頂から、警固の甲冑武者の到着をまって、牛尾・三宮の順に、駕輿丁が担ぎ、急坂をかけ降りる。神輿のうしろには、縄がつけられ、前を、長い青竹で支えながら進む。その後、東本宮の拝殿に神輿のうしろを合わす形で安置する。「シリツナギの御供」とよぶ御供が献げられ、ここで「御生れ」の祝詞が上げられる。これは男神と女神の二柱融合をあらわす儀礼であるといわれている。この午の神事は、八王子山山頂にある山宮(奥宮、牛尾宮と三宮)の荒魂を、里の地に移し、ここに里宮(東本宮と樹下宮)が成立する過程をわらわしたものであるといわれている。また、春に山から里へ神霊を迎える行事ともみられ、農耕儀礼の性格を強く示しているといわれている。

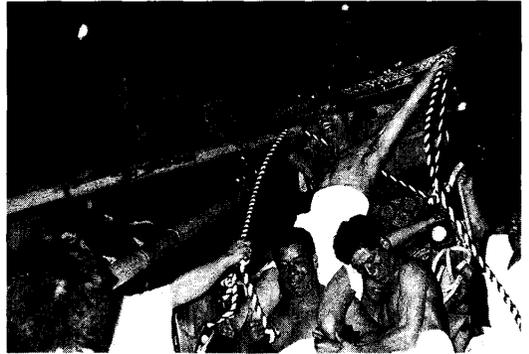


写真1 午の神事

なお、神輿を担ぐ人数は32名で、最初に担ぐ人を「ホンガタ」、途中での交代要員を「スケ」といっている。また、最後まで担ぎ続ける人を「モチキリ」という。担ぐ位置は最初から決っており、4月2日にどこを担ぐかを定める「カタグミ(肩組)」が行われる。かつては地区によって担ぐ神輿が決まっていた⁵⁾が、現在は四つの駕輿丁組織があり、相談をして決めている。担ぐ位置は、「山の表」・「谷の表」・「山の裏」・「谷の裏」(13日の未の神事では、山・谷のかわりに、南・北といっている)のそれぞれに、「ハナ」・「ウチバリ」・「ニマイメ」・「ウチガラ」・「ソトガラ」・「ウチスズ」・「ソトスズ」・「コウラン」という名称がついている。神輿の梶は、8名で、山谷の表裏にそれぞれ、「ホンカジ」と「ソエカジ」が1名ずつつく。神輿を担ぐ人を駕輿丁といい、担ぐ前に参道の石鳥居下付近で勢揃いが行われ、そこで担ぐ場所と氏名が呼び上げられる。これを「ツド」といっている。

④ 4月13日(卯月中の未の日)〔未の神事〕

〔神輿入れ神事〕東本宮・樹下・牛尾・三宮の神輿を、宵宮場(大政所)に安置する。

〔献茶祭〕宵宮場の四基の神輿に新茶を献じる。

〔花渡り式〕甲冑武者姿の稚児と色布で結ばれた造花の大指物をもつ青年たちが、表参道を練り

歩き、宵宮場と西本宮に参拝する。これは、稚児による献花の儀式を象徴したものとされている。

〔未の御供〕京都の山王町から未の御供を、宵宮場の神輿に献じ、さらに西本宮にも献上する。この神饌は特殊なもので、やがて生まれ出る神の子のために、人形や笛なども入っている。

〔宵宮落し神事〕夜に入り、宵宮場の四基の神輿が、「ツド」を終った駕輿丁によって、長時間後に激しく振り上げ、振り下げられる。これは、別雷神誕生の苦しみをあらわしたものであるといわれており、生産の豊穰を祈る農耕儀礼の形態をもちこんだものとされている。この神事の途中に古風な獅子舞や、「綾織り」と通称されている古い田楽が演じられる。その後、警固の甲冑武者（「トビ」という）が到着すると、駕輿丁は動作をやめる。祭委員長の祭文ののち、「トビ」が一斉に拝殿上から飛び降りると同時に、四基の神輿は拝殿下に振り落とされる。そして駕輿丁に担ぎあげられ、お互いに激しく先を争う。その後、神輿を整え西本宮へと渡御する。

⑤ 4月14日（卯月中の申の日）「申の神事」

〔例祭〕午前中に東本宮の例祭、続いて西本宮の例祭が行われる。その中で、西本宮の本殿前において天台座主以下延暦寺の僧による奉幣と読経が行われる。

〔大櫛神事〕天孫神社から大櫛が還御する。

〔神輿渡御〕西本宮の拝殿から七基の神輿が、西本宮・東本宮・宇佐宮・牛尾・白山・樹下・三宮の順に出発し、琵琶湖岸の七本柳に到着する。ここで七基の神輿を神輿船に乗せ、湖上を唐崎沖へ進む。唐崎沖では御供船によって旧粟津地区から「粟津の御供」が献じられる。その内容は、粟飯・「ぶどまがり（米粉団子の菓子）」・瓶子・塩鯛・茗荷など九品である。その後、神輿は、若宮神社を経て日吉大社へ還御する。このような船渡御は、『日吉神社神役年中行事』によると、文永年中（1264～75）以後のことであり、以前は陸路を利用していたとしている⁶⁾。

この申の神事は、七社の神輿が全部参加しているが、もともとは西本宮の祭事であり、大己貴神が大和の三輪山から、比叡の山口の地に遷座した過程をあらわしたものであるといわれている。なお、この神事に参加する人々は、桂の小枝を頭にかざしている。

⑥ 4月15日（卯月中の酉の日）「酉の神事」

山王七社の神々に対して祭礼終了の御礼巡拝を行う。

この祭りは、大きく西本宮系の祭りと、東本宮系の祭りに分けることができる。4月3日の大櫛神事と14日の申の神事は西本宮系、12日の午の神事と13日の未の神事は東本宮系の祭りである。

3. 神戸の山王祭

(1) 日吉神社

岐阜県安八郡神戸町に鎮座している神社で、坂本より勧請⁷⁾され、祭神も同じである。

神戸は、延暦寺領の平野荘とよばれる荘園であり、その荘園を鎮守する神社であった。平安末期には、延暦寺の保護のもとに、日吉社神人による商業活動が行われていたと思われる⁸⁾。その後、平野荘の衰退や洪水などにより、神社も衰退していった。一方、神戸は、交通の要路であったことにもより、門前市が発達し、江戸時代には、九齋市が行われ、地方の商業都市として栄えた。

(2) 山王祭

祭りの起源については、不明であるが⁹⁾、今の神輿は、貞享四年(1687)に製作されたものである。この神輿は、日吉神社境内に納められていたが、文久(1861～64)以後、各町内が保存管理するようになった。祭りの次第は、貞享四年に整備改正、明治五年(1872)に一部変更され、現在は次のようになっている。

① 4月13日（卯月二ノ未日）「試楽」

午後2時ごろ、町内の青少年により小型の中神輿が町内を回る。

夕刻、善学院（最澄の開基と伝える。日吉神社の別当であった）の法印による社参があり、神前

で読経が行われる。次に石原伝兵衛家（日吉神社・善学院の創建に深くかかわったと伝えられている安八大夫安次の後裔という）の当主の社参，続いて祭主の社参が行われる。

② 4月14日（卯月二ノ申日）「本楽」

〔朝渡御〕渡御に先立って、その道筋を榊と太鼓が回り、次に警固の甲冑武者が拝殿に到着する。午前0時、祭主は多数の「護衛松明」を先頭に、祭典事務所を出発し、ゆっくりとして歩調で、神社拝殿まで進み、神輿（4月11日から拝殿に七基とも安置）に対して拝礼する。この瞬間、本町の牛尾宮神輿が出発する。総門を通過すると、そこに置かれていた二本の大松明が合わされ、それが合図となって次の横町の樹下宮が出発する。続いて新町の大宮・三津屋の二宮・宮町の宇佐宮・下町の客人宮・鍛冶屋町の三宮の順に出発する。神輿は、多数の大小の松明（麻木で作ってある）に前後を護られながら、かけ走り、小さな川を渡り、御旅所に到着する。この川には唐崎神社がまつられており、坂本の船渡御になぞらえたものであるといわれている。渡御の途中で「カタガワリ（肩替り）」といって、神輿を担ぐ（「つる」という）人全員が走りながら、所定の場所（4～5カ所）で、順に入れ替って行く。担ぎ終った人は、直ちに「テビキ（手引）」として自分と入れ替った人の腕を上げて一緒に走る。神輿は担ぎ手だけでは走らないので、担ぎ棒のうしろを、手のすいている人がつく。なお、神輿を担ぐ位置は決っており、4月12日の夜各町内で肩決めが行われる。それを「テングミ」という。担ぐ人数は1肩8名で、担ぐ位置は、左右それぞれ「チョングチ」・「マエノスズンタ」・「ウシロノスズンタ」・「タガネ」という名称でよばれている。それに、「マエカジ」・「ウシロカジ」がつく。朝渡・還御では6～5肩を決める。さらに、担ぐ場所をクジで決める。

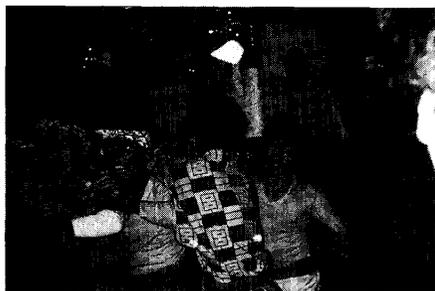


写真2 朝渡御

〔本楽祭〕午前中、本殿前で本楽祭が行われる。その後、「チカラガミ（力紙）」という22本の長い紅白の幣を扇型に編んだ御幣を拝殿屋上にかかげる。

〔昼渡御〕渡御に先立って、榊・太鼓と甲冑武者が共に町を回る。午後1時、朝渡御と同様に祭主は行列をたてて御旅所前へ行き、神輿に拝礼する。同時に牛尾宮が出発し、町内を回る。途中まで来ると御幣が振られ、それを合図に次の神輿が出る。七基全部が順に渡御をして、御旅所へ戻る。最近では、昭和60年に行われただけで、実施されていない。

〔還御〕還御に先立って、その道筋を榊・太鼓が回り、甲冑武者が御旅所前の所定の位置に着く。午後5時、石原伝兵衛家の当主が供饌使となって行列を整え、社務所から出発する。この行列のなかには、四つの指樽（神酒を入れた長方形の樽）や、王飯御供といわれている梅花・粟飯（分蓋盛）・簾御供・御菜（フキ・イモ・竹ノ子）・御鏡（切餅）・粽の御供を入れた四つの籠などがある。一方、祭主は祭典事務所を出て、「松鋸」・「竹鋸」の二つの飾り物や二つの指樽などを持った行列を整え、御旅所前の棧敷へ入る。石原氏の行列も前後してこの棧敷に入り、祭主と石原氏は神々との盃をかわす。この頃、拝殿上の力紙が投下され、これを若者が奪いあって、御旅所に向かってかけていく。石原氏と祭主の盃が終わる頃、力紙を持った若者が御旅所に到着し、牛尾宮神輿へ力紙を投げつける。同時にその神輿が、朝渡御と逆のコースを走り拝殿に向かう。その後、順に全部の神輿が還御を終る。そして、拝殿で神輿の霊抜きの神事が行われ、その後、「帰り神輿」となり、七社の神輿は練りながら各町内の神輿蔵へ帰っていく。

4. 二つの祭りの比較

二つの山王祭を比べてみると、次のことがいえると思う。

(1) 祭日・祭神

両方とも同じである。これは、神戸の日吉神社が坂本の日本大社の神々を勧請したことによる。

(2) 祭りの形態

① 神事

特徴的なことは、両方とも天台宗の僧侶による神前での読経が行われることである。これは、両方とも、神仏習合の形態がよく残されていることによる。

② 祭りの形態

第1は、両方とも七社に七基の神輿を持ち、その七基の神輿の渡御が祭りの中心になっていることである。神戸の場合は、江戸時代市が開かれ商業が発達し、かなり裕福な商人が存在したことも大きな要因であったと考えられる¹⁰⁾。

第2は、神戸の場合、坂本の祭りのうち、東本宮系の祭り（午の神事と未の神事）がないということである。これは、西本宮系の祭りである申の神事が、日吉大社の祭りを代表するようになっていたことによっても考えられる。また、東本宮系の祭りは、神体山と深い関係があり、農耕儀礼的側面を持っているので、山がない神戸では行われなかったとも考えられる。なお、垂井町の南宮大社の祭りでは、舞殿に安置された神輿を、渡御の前に、前後に激しく振り上げ振り下げて、床の板を破る。これは、坂本の未の神事の宵宮落しによく似ている。

第3は、神輿以前の古い形態である榊の渡御の問題である。坂本は、大榊神事として行われているのに対して、神戸では、神輿の渡御の前に簡単に行われ、軽く扱われているように思われる。

第4は、坂本では、警固の甲冑武者が、大きな役割を果たしているのに対して、神戸では形骸化しているように思われる。それに代って、祭主（かつて代官が行っていた役割を行うといわれている）の役割が大きいといえる。

第5は、神戸の場合、祭りの中で祭主とともに、大きな役割を果たしているのが、石原伝兵衛家である。

第6は、神輿の渡御順の違いである。坂本の場合は、西本宮（大宮）・東本宮（二宮）・宇佐宮・牛尾・白山（客人）・樹下・三宮の順であるのに対して、神戸は牛尾・樹下・大宮・二宮・宇佐宮・客人・三宮となっている。この神戸の順番は、貞享四年の時と同じである。なぜ異なるのかはよく分からないが、神戸では、西本宮系・東本宮系というように分けてみる見方がないことも一因ではないかと思われる。

③ 神輿の担ぎ方

坂本の申の神事の渡御は、「練る神輿」であるが、午の神事では、急坂を下るため、「走る神輿」になる。また未の神事では競争をするので、これも「走る神輿」であるといえる。それに対して、神戸は全て「走る神輿」である。神戸の「走る神輿」の発生について、『日吉神社祭典考』では、貞享四年の史料に「神輿壺社に捨六人つつ」とあることから、現在のやり方と違っていたと推測し、神輿が各町内に保管されるようになった後、各町内から神輿を拝殿に飾るために先を争って担ぎ出したのが変化し、現在の「走る神輿」になったと推測している。しかし、神戸の「走る神輿」は、坂本の東本宮系の「走る神輿」の影響を受けたのではないかと考えられる。

(3) 供物

坂本は「粟津の御供」、神戸は「王飯御供」という伝統的な神饌が、祭りのなかで重要な意味をもっている。両者に共通するものは、粟飯である。

(4) 祭りの組織

坂本は、四つの駕輿丁組織があり、担ぐ神輿を相談して決める。しかし、以前は担ぐ地区が決っていた。なお、祭りに参加する人々は、自分達の地区でも氏神があり、両方の祭りを行っている。神戸は、神戸町神戸（いわゆる町方）の各町内が神輿を保管し、その神輿を担いでいる。しかし、

一つの町内で一つの神輿を担いでいる場合もあるが、一つの神輿を、保管している町内と、他の町内（この場合は、いわゆる村方）とで担いでいる所もある。この村方の町内を「スケ」とよんでいる。このように神戸の場合は、町方の町内とかつて純農村であった村方の町内とが連合して行う祭りである。この町方と村方との関係を、伊東久之氏は祇園祭の親町（鉾町）と寄町の関係に似ていると指摘している¹¹⁾。

5. おわりに

二つの祭りを比較してみると、神戸の山王祭は、坂本の山王祭を強く意識していることが分かる。しかし、全部坂本のように行うのではなく、神戸という風土の原空間に根ざした選択が行われているように思える。また、祭りの形態や組織のなかにも、神戸の歴史が反映していると考えられることができる。

註

- 1) 岐阜県の祭りについては、岐阜県教育委員会『岐阜県無形民俗資料記録作成報告書（第一～六輯）』・同『岐阜県指定文化財調査報告書』・岐阜県博物館『開館10周年記念展 ふるさとの祭り』などがある。
- 2) 拙稿「民俗芸能についての一考察—西濃における作り物風流—」（本誌第6号 昭和60年）に述べた。
- 3) 『新修大津市史・古代・第一巻』（昭和53年）は、宇佐宮の勧請の時期を、石清水八幡宮が宇佐から八幡神を迎え創建されたのが、貞観元年（859）だから、それ以後であると推測している。
- 4) 江戸時代の祭礼の次第は、天保八年に書かれた「日吉御祭礼之次第」（『日本祭礼行事集成第一巻』平凡社 昭和42年）に記されている。
- 5) 「日吉御祭礼之次第」に次のように記してある。「御神役加輿丁村之事 大宮 滋賀郡山中村 二宮 城州愛宕郡八瀬村 高野村 滋賀郡上仰木村 辻ヶ下村 聖真子 滋賀郡千野村 苗鹿村 雄琴村 八王子 愛宕郡一楽寺村 修学院村 客人宮 滋賀郡高畑村 穴太村 真野村 十禅師 同志賀四村 三宮 同平尾村 下仰木村」
- 6) 「日吉社神役年中行事」（『日本祭礼行事集成第二巻』平凡社 昭和44年）に次のように記してある。「昔ハ御船祭一切無之、文永年中以来之御船祭也、文永年中ニ湖水九十九浦水込而浜四屋ヨリ唐崎ヘ不通也、(略)昔元三大師御治山之刻臨時之祭礼三ケ度有執行竜頭鶴首敵重タリ、任彼ノ吉例御船祭執行畢、其頃打統洪水之間御船祭有年々其後悉御船祭也、(略)」
- 7) 伝承によると、最澄によって、大宮・二宮・宇佐宮・樹下宮が勧請され、円仁によって、牛尾宮・客人宮・三宮が勧請されたと伝えられている。なお、安八大夫安次がこの勧請に深くかかわったと伝えられている。
- 8) 嘉応二年（1170）の山門（延暦寺）衆徒の強訴事件から推測できる。これは平野荘日吉神人が杭瀬川に葛粉を売りにきて、尾張（藤原成親の知行国）の目代政友に乱暴されたことに端を発し、成親の配流で着したものである。
- 9) 源頼朝が建久年間（1190～99）に社領を寄進し、七社の神輿を奉納したと伝えられている。
- 10) 貞享四年の記録に次のように記してある。「(略)八王子大権現神輿 壺社 施主 新井松兵衛 十禅師大権現神輿 壺社 施主 高橋惣太夫 高橋惣五郎 高橋惣治郎 (略) 二宮大権現神輿 壺社 施主 田代七郎兵衛 (略)」
- 11) 「在郷町の祭礼における親町と寄町——岐阜県神戸町・日吉山王まつりについて——」に詳しく記されている。

<主要参考文献>

- 『新大津市史 別巻』大津市 昭和38年 『新修大津市史 第一・四・七巻』大津市 昭和53・56・59年
『日吉古代祭記』官幣大社日吉神社 昭和18年 神戸町文化財審議会編『日吉神社祭典考』 昭和35年
吉岡勇編著『神戸町史』神戸町 昭和44年 石原伝兵衛『神戸山王社紀』 昭和60年
伊東久之「在郷町の祭礼における親町と寄町」（『中京民俗研究』記念号中京大学民俗学研究会 昭和61年）
岐阜県教育委員会『岐阜県指定文化財調査報告書・第九・二十五巻』 昭和41・57年